



かぜ 地域医療 について だより

水口市民病院 内科
伊藤誠紀 医師

一般に、ひとりの人が年に5回程度「かぜ」にかかり、その原因の90%は、ウイルス性であると言われています。症状は、発熱、頭痛、咳、のどの痛みなど様々ですが、通常1週間程度で自然に治ります。

治療として、特効薬というものはなく、症状をやわらげる薬（熱さまし、痛み止め、咳止めなど）を使います。最近、発熱はウイルスを排除するための生体反応であるため、熱さましは慎重に使うべきであるとの意見があります。一方、漢方薬はその生体反応を活性化させるとの報告があり、注目されてきています。いつれにしても治るまでの期間を大幅に短縮できるわけではありません。点滴についても同じで、早く治る点滴があるわけではありません。ただし、インフルエンザには、特効薬が開発されており、早期に使用することで回復を早めることができます。また、長引いて細菌感染を併発した場合には、抗生物質を使用すると効果的なことがあります。

「かぜ」は、規則正しい生活、うがい、手洗い、マスクなど予防が重要です。もし、かかってしまったら、消化のよいものを食べ、水分を十分に摂って、あたたかくして、体を休めてください。



水口市民病院 ☎62-3346 FAX 63-1728

「ふるさとのなまなりつかし停車場の人ごみの中にそれを聞きに行く」という石川啄木の歌があります。生まれ育った土地の言葉は、故郷の海や山の景色とともに懐かしく、瞬時に互いの心をかよわす力をもっています。

方言とは共通語と異なり、ある地方だけで使う語をいいます。しかし、単に地方語というだけでなく、古い時代の言葉を伝えるものがあり、「方言学」という研究分野があるほどです。

写真の冊子は、大正4年(1915)、今から90年前に大原尋常高等小学校(現大原小学校)の訓導(教諭)であった瀬古吉弘先生が、大原村の方言を採集し、当時の国語教科書などによって「選定語」定め、その矯正法を示した手書きの指導書で、年間のカリキュラムまで組まれています。ここでは、方言を好ましくないとする視点も見えますが、結果的に貴重な言葉が集められました。

そこで問題です。この冊子がのせている方言と意味の組み合わせを考えてください。

【方言】

- ①ヨダルイ ②ノドル ③キリモン ④オハナシ
⑤デホっカイ ⑥アシプト ⑦オナリ ⑧ヒダルイ
⑨ダンダ(幼児語) ⑩ウケ

市史の小徑

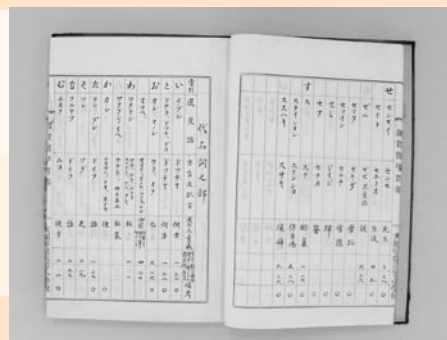
第5回

90年前の方言記録

【意味】

- aでたらめ bきもの cさい銭
d足跡 e炊事 f入浴 gはずかしい
h汁 iさわぐ jひもじい

見当がつかましたか。今も使われているもの、国語辞典に見える古い言葉もあれば、他に類例のない方言もみられます。方言は言葉の歴史を伝えるとともに、地域の生活語として、またふるさと意識のよりどころとして、まだまだ生命力と魅力を持った言葉です。



▲大原小学校蔵

【答え】

- ①g・②i
③b・④c
⑤a・⑥d
⑦e・⑧j
⑨f・⑩h

【問い合わせ】 総務課市史編纂係
☎ 86-8075 FAX 86-8380